

一 橋 大 学 哲 学 会 報

一 橋 大 学 哲 学 ・ 社 会 思 想 学 会 会 報 No. 8
(「研究会便り」より通算第36号)

発行者 一橋大学哲学・社会思想学会
発行所 一橋大学哲学・社会思想学会事務局 tel./fax 042-580-8644
〒186-8601 国立市 中2-1 一橋大学社会思想共同研究室内
Email: cs00310@srv.cc.hit-u.ac.jp

一橋大学哲学・社会思想学会

第7回研究大会・総会のご案内（研究会より通算第37回）

日時 2010年6月5日（土）1：40開場

場所 本館一階 特別応接室

第4回総会 2：00～2：40

研究発表（1） 2：50～4：20

小谷 英生（一橋大学大学院社会学研究科博士課程）
カント倫理学とM・ウォルツァーの正戦論

（10分休憩）

研究発表（2） 4：30～6：00

小川 勝（一橋大学大学院社会学研究科）
消費財デザインにおける日本の戦後モダニズムとポストモダン

（発表時間 45分 質疑応答時間 45分）

終了後、有志にて懇親会の予定です。こちらの方にも振るってご参加ください。
発表者の報告要旨は次ページ以下に掲載されています。

なお当日は総会に先立って幹事会を行いますので、学会幹事の方は1：30に会場にお集まりください。

【目次】

研究発表（1）レジュメ（小谷英生氏）	2 頁
研究発表（2）レジュメ（小川勝氏）	3 頁
第 6 回学会発表まとめ（藤田公二郎氏）	3 頁
第 6 回学会発表まとめ（菊谷和宏氏の発表へのコメント）（平子友長氏）	5 頁
社会思想共同研究室所属教員の異動	6 頁
第 4 回総会議案書（案）	7 頁

研究発表（1）

カント倫理学と M・ウォルツァーの正戦論

小谷 英生（一橋大学大学院社会学研究科博士課程）

現代正戦論の代表的著作『正義と不正義の戦争』の第 4 版序文（2006 年）において、M・ウォルツァーは、イラク戦争が第二次大戦におけるドイツ・日本への介入とは異なり、純粹に国家体制変革 regime change を目的とした軍事介入であることを指摘しつつも、イラク戦争を全面的に肯定している。

同書は一般に、ベトナム戦争にたいする反省という文脈で書かれたとされるが、約 20 年を経て「〈体制変革〉は戦争への正当な理由 just cause であるか？これが、間接的にではあるが、『正義と不正義の戦争』のなかで指向された問いであった」（M・Walzer, *Just and unjust wars*. 4th ed., Basic Books, 2006 [1st ed., 1977], pp ix）と再解釈されてしまう。この点で、ウォルツァーの議論は両義的で、政治的かつ恣意的に利用されてしまいかねないあやうさがある。

また、「以前起こったこと [=イラクによるクエート侵攻] は、体制がかわらないかぎり再び起こるであろう」（ibid, pp xiii）という、イラク戦争を肯定する発言には、倫理的観点からすれば不可解な点がある。なぜならば、この発言は相手の国家に対する不信を表明するものであり、同時に、相手の動向に左右されるという意味で、他律をふくむものだからである。

すでに御子柴善之が指摘しているように、「他者を信頼することは [裏切られるという] リスクを引き受けること」（「信頼と永遠平和」、拓殖大学人文科学研究所編『人文・自然・人間科学研究』第 23 号、2010、25 頁）にほかならない。したがって相手国が信頼できないから体制をかえてもよい、という理屈は成立しないはずである。

また、そもそも倫理学とは主体の意志規定を対象とする学問であり、そのかぎり主体の主体性（自律）にかかわる学問でもある、と発表者は考えている。いいかえれば、戦争を倫理的に問題にする場合、相手国の動向はさておき、自分たちはどうすべきかを問わなければならないのである。

以上のような論点をふまえ、本発表では、カント倫理学とウォルツァーの正戦論を検討しつつ、倫理学が現代的な戦争論にどのようなかたちでコミットしうるのか、考えてみたい。

研究発表（2）

消費財デザインにおける日本の戦後モダニズムとポストモダン

小川 勝（一橋大学大学院社会学研究科）

消費文化や工芸、産業振興など、物を介して人と人・人と社会・社会と社会が影響しあう様子を考察する、比較的新しい分野として、今日の「デザイン史」があるが、デザイン史の起こりは「モダンデザイン史」であり、さらに言えば、モダニズムの立場の人々が、芸術のアカデミズムにたいして自らの主張を訴えるためになされたものであった。そのため、過去の様式や生産方式よりもモダニズムがいかに優れているか、これからいかに発展していくか、直線的な発想で考えられがちであった。

ヨーロッパやアメリカの影響を受けた日本のモダニズムも、古い生産方式や生活様式を改善し、製品の輸出を増やして、どう日本の社会や経済を発展させていくか、また発展してきたかという直線的な歴史観で語られていた。こうした立場から戦前・戦後の日本の消費財デザインが捉えられると、戦前にヨーロッパやアメリカから現代美術や建築の動向が伝えられ、戦争という不幸な中断があり、戦後に様々なプロジェクトが花開く、という成功の物語として語られる。

しかし、これは 1960 年代ごろまでしかカバーせず、その後の大量消費社会は大企業の大衆扇動によるものとして、いわば外圧によって、モダニズムの望ましい発展が妨げられたものであるかのように捉えられる。モダニズムは一枚岩であって、1960 年代と 1970 年代の間、モダンとポストモダンの間には越えがたい断絶があるような印象を与えてきた。

これに対し、本報告では、モダニズムの担い手たち（デザイナー・評論家・建築家など）が戦後の 1950 年代から 1970 年代に通じて必ずしも一貫した立場を維持していたわけではなく、消費者との関係を模索し立場を変容させながら 1970 年代をむかえていたことを、資料を通して示していきたいと思う。具体的には 1973 年の第 8 回「世界インダストリアルデザイン会議」・京都大会の議事録とそれ以前の同会議を伝えた記事、「世界デザイン会議」（東京、1960 年）の議事録を扱う。

モダニズムの担い手たちは生産者であり、これらの人びとがデザインを通じて働きかけようとしていたのは消費者でした。生産者と消費者と望ましい関係を考えることは、トヨタのリコール問題や、製造業をはじめとした日本企業の新興国展開などの事例をみても、今日大いに求められていることです。報告させていただく本学会は、哲学(者)・社会思想(家)やその著作の研究に取り組んでおられるかたがたが多いとは思いますが、社会の「啓蒙」・「知識人」と「大衆」の関係といったテーマはデザイン史と関心を共有できる分野であり、また哲学研究のほうがデザイン史よりもこうしたテーマに概念的に深みのある理論を有していると思われまます。他分野からの新しいアイデア・概念など、ご教示いただければ幸いです。

第 6 回学会発表のまとめ

力と認識 ～～フーコーのニーチェ読解～～

藤田 公二郎（一橋大学大学院社会学研究科博士課程）

2009 年 12 月 5 日、「力と認識——フーコーのニーチェ読解」という標題で研究発表をさせていただいた。当初標題は、「フーコーのニーチェ読解——権力分析の理論的モデル」としていたが、学会当日、予告していた発表内容に即ちした標題へと変更した。以下ではまず発表内容を簡単に要約し、次

にお寄せいただいたご質問やご意見を紹介し、十分応答できなかったものについて補足的な回答をおこないたい。

本発表の目的は、フーコーがいかにニーチェの権力観を理解していたかを明らかにすることにあつた。一般にフーコーは、ニーチェの系譜学や権力観から大きな影響を受けていると言われている。だが実際のところ彼は、若干のニーチェ論を系譜学の観点から執筆しているだけで、いかにニーチェの権力観を理解していたかについては、これまで断片的にしか明らかにされてこなかった。したがって本発表では、フーコーのニーチェ論を可能な限り仔細に分析してゆくことで、議論の背景において暗黙の内に了解されていたニーチェの権力観を浮かびあがらせようと試みた。つまり、フーコーによって概念としては取り扱われていないものの準概念のような地位にある一連のニーチェ的な観念、力、出来事、身体、認識などについて、それらの語彙の使用個所や用法などを網羅的に検討し、それらの明確な定義を導き出し、観念の連関関係を明らかにしようとしたのである。

発表の前半では、力の観念を中心に検討した。フーコーのニーチェ読解によれば、力は世界の基本要素として世界を満たしている。諸々の力は恒常的な闘争状態にあり、その結果、いたるところで無数の力関係が出来事として成立し、身体に刻印されている。こうして世界には、膨大で複雑な力関係の総体が存在している。発表の後半では、こうした力の観念との関係において認識の観念を検討した。人間の認識活動は、実のところ、真理への愛を通じてではなく力の闘争を通じて展開している。つまり、認識の背後には、認識する人間の諸々の悪しき力、悪しき情念が存在していて、それらは一方で認識される事物と闘争しており、他方で自分たちの間でも闘争している。この二重の闘争の偶発的な効果として認識は出現するのである。こうした認識のメカニズムには、認識と認識される事物との間に本来的断絶が存在しており、それは、デカルト哲学以来両者の対応関係を保証してきた神がもはや不在であることを意味している。そこにはまた、認識と本能との間にも本来的断絶が存在しており、それは、デカルト哲学以来両者の連続性が保証してきた人間の統一性がもはや不在であることを意味している。以上、こうした力の闘争とそれを背景に展開する認識こそが、フーコーの理解していたニーチェの権力観の全容であった。

発表会場では、多くの方からさまざまなご質問やご意見をいただいた。フーコーの哲学史観がやや図式的すぎるのではないかということや、その哲学史観がどのような思想的背景において養われたのかということについて。また、認識の相対性を主張するニーチェの認識観自体の絶対性に関してや、認識される事物の客体化の過程に関して。さらには、カントの認識批判との関連や、イデオロギー批判との関連でもご質問が寄せられた。なかでも、認識と本能の関係をめぐってはいくつか疑問点が提起されたので、ここで改めて補足的な説明をおこないたい。

まずは、フーコーのデカルト読解が不正確でないかという疑問点。フーコーによれば、デカルト哲学以来、認識と本能、あるいは精神と情念は連続性の関係にあり、それが人間の統一性を保証してきた。だが、周知の通り、デカルトにおける精神の思惟作用は、たんに思惟することだけでなく、感覚することもまた含まれている。それゆえ、おそらくこうした点から質問者は、デカルトにおいては精神の内に情念があり、精神と情念の単調な二元論的關係は成立しないと示唆されたのだった。実際のところこの指摘は、厳密に言って正しい。フーコーは、単純化したとは言わないまでもかなり一般化した図式を用いてデカルトを読解している。しかし、ここで指摘された事柄、つまりそうした図式に合わないものとして指摘された事柄は、結局のところ、フーコーの主張の決定的な反証にはならず、むしろ反対に傍証

にさえなってしまうように思われる。というのも、精神の内に情念があるのは、精神が松果腺を介して身体の声を経験として聞いているからであって、そこには、精神と身体、認識と本能の連続性が存在していると言えるからである。

次に、ニーチェにおいては、認識と本能がむしろ連続していると言えるのではないかという疑問点。フーコーは最終的に、ニーチェにおいて認識と本能の間に断絶が存在していると結論付けたが、しかし他方で彼はそれに先立って、ニーチェにおいては認識が諸々の本能の結果であると述べていた。こうした点から質問者は、むしろ認識と本能の間には連続性が存在すると言うべきではないかと指摘されたのだ。この点に回答するためには、「認識が諸々の本能の結果である」ということの意味を今一度十分に吟味しなくてはならない。フーコーがこの言葉で言おうとしていたのは、認識が、本能の内的プログラムに書き込まれた何かであるとか、本能の自然的開花によって必然的に実現する何かであるとかといったことではない。彼が言おうとしていたのは、認識が、諸々の本能の闘争を通じて歴史的に出現したものであり、諸々の本能の間隙において偶発的に発生したものであるということである。それゆえたしかに認識は、ある意味で本能と関係をもっているが、それは内的で必然的な仕方では結びついているのではなく、外的で偶然的な仕方では接しているにすぎない。フーコーはこうした接触を、認識と本能の間の断絶と表現したと思われる。

以上、本発表の内容を要約しなおした上で、寄せられたご質問やご意見を簡単に紹介させていただいた。なかでも、認識と本能の関係をめぐる二つの疑問点に立ち止まったが、結局のところ、それらが提起されるに至った主たる原因は、発表者の論証がときに性急で、説明不足であったことにあるように思われる。こうした拙い発表にもかかわらず、会場にお集まりいただいた皆様には寛大にご聴取いただき、さまざまなご教示を頂戴した。この場を借りて改めて心よりお礼申し上げたい。

第6回学会発表のまとめ

菊谷氏の「トクヴィルにおけるアソシアシオンとコミュニケーション」についてのコメント

平子 友長（一橋大学社会学研究科教授）

菊谷氏は、トクヴィルの主著の一つ『アメリカのデモクラシー』の中に「政治的アソシアシオン」と並んで「市民的アソシアシオン」という特異な概念が提起されていることに着目し、両概念の違いを検討しつつ、とりわけ「市民的アソシアシオン」というパラドクシカルな概念が提起されざるをえない根拠を、近代社会それ自体が抱えている社会的矛盾のうちに見いだしている。アソシアシオンとは、フランス革命後ル・シャプリエ法によってそれ以前に存在していたすべての中間団体が禁止され、人々が社会的絆を喪失して（それから解放されて）独立の諸個人に還元されたことを前提として、それら諸個人が自由な意志に基づいて人為的に結成する組織のことである。「政治的アソシアシオン」とは、このようにして意志的・契約的に結成された組織を意味する。それは自由に結成されたものであるがゆえに、自由に解消することも、脱退することもできる組織である。ところがトクヴィルは、このような「政治的アソシアシオン」がそもそもアソシアシオンとして機能するためには、特定の政治的目的なしに人々を自然的に結合する「市民的アソシアシオン」が不可欠であると主張する。トクヴィルは、この「市民的

一橋大学哲学・社会思想学会第4回総会議案書（案）

(1) 2009年度の活動報告

①研究発表会の開催

第5回研究発表会（2009年6月6日 特別応接室）（参加者15名）（通算35回）

1. 白井亜希子（社会学研究科博士課程）

「愛しい子どもよ、ああ、お願いだ、小人のためにも祈っておくれ

－W.ベンヤミンにおける<せむしの小人>および<侏儒>のモチーフをめぐって」 コメンテーター 久保 哲司

2. 市川 裕史（津田塾大学講師）

「フランスのパンク文学について」

コメンテーター 中野 知律 以上 司会 平子 友長

第6回研究発表会（2009年12月5日、職集大広間）（参加者23名）（通算36回）

1. 藤田公二郎（社会学研究科博士課程）

「フーコーのニーチェ読解 －権力分析の理論的モデル」

司会 福島 和己

2. 菊谷 和宏（和歌山大学）

「トクヴィルにおけるアソシアシオンとコミュニケーション」

司会 平子 友長

②学会発表者の募集

2010年の発表者の募集を行った（募集期間2009年12月10日～2010年2月26日）メール及び葉書で募集案内を出したが、応募者はいなかった。

③「一哲学会報」の発行

【第7号】（2009年11月2日発行）

第6回研究大会の案内、学会発表者の報告要旨（2本）、第5回発表者の報告まとめ（2本）第3回総会報告（議案書の一部掲載）

【第8号】（2010年 月 日発行）

第7回研究発表会の案内、第4回総会案内、学会発表者の報告要旨（2本）、第6回発表者の報告まとめ（1本）、同コメント（1本）、総会議案

④総会・幹事会・その他

第3回総会 2009年6月6日（土） 本館特別応接室 議長 古茂田 宏

第6回幹事会 2009年7月22日（木） 社会思想共同研究室

第7回幹事会 2009年12月5日（土） 職員集会所大広間

第8回幹事会 2010年3月3日（水） 社会思想共同研究室

第9回幹事会 2010年6月5日（土） 特別応接室

(2) 2010年度の活動計画

① 研究発表会の開催

第7回研究発表会 (2010年6月5日、本館 特別応接室)

第8回研究発表会 (2010年12月4日)

第9回研究発表会 (2011年6月予定)

② 学会発表者の募集 (2010年12月～2011年2月を予定)

③ 「一哲学会報」の発行 (年2回9号、10号を予定)

④ 会員名簿作成事業 (卒業生名簿の配布)

⑤ 次期総会の準備 (2011年6月) その他

(3) 学会幹事の提案

2010年度の幹事として、以下の者を提案する。また院生幹事は適宜、補充する。

教員幹事 嶋崎 隆 古茂田 宏 森村 敏己

院生幹事 色摩 泰匡 南 孝典

助手幹事 干場 薫

*本学会の教員幹事は、旧研究会から引き継いだ輪番表 (2003年3月5日決定) に基づき、負担が公平になるように、交替制で担当することになっている。ただし、輪番表に含める教員については、適宜見直しをする。

年度	森村	平子	嶋崎	古茂田	岩佐
2008年		○	○	○	
2009年			○	○	○

	嶋崎	古茂田	森村	大河内	平子
2010年	○	○	○		
2011年		○	○	○	

(4) 会計報告

旧哲学・社会思想研究会から引き継いだ現金の中から2回の学会でお茶代として、608円支出、残額4,872円になった。なお、本学会は学会費を徴収しない。



【学会代表幹事】(敬称略) 岩佐 茂 嶋崎 隆 古茂田 宏

【学会事務局】 干場 薫 色摩 泰匡 南 孝典